

かう途中のことであった。誰かがドリ안의強い匂いがするといって騒ぎだした。ジープには積まない申し合わせになっていたらしく、車内点検が開始された。しかし、車内には一向に見当たらない。やむなくジープを停めて総点検となった。その結果、後部のバンパーにしっかりと結びつけられた、布袋に入った多数のドリアンが発見された。その処置がどうなったかはさだかではないし、いまさら暴露する必要もない。ドリ안의持つ魅力と強烈な異臭がもたらした一つの笑い話である。

おわりに

わずかに1か月の滞在ではあったが、ブナカット苗畑で生産された苗木がトラックに満載されて試植林に次々と運ばれ、私も何度か造林地を訪れることができた。背丈を越すようなアランアランの広大な草原を筋状に耕耘し(写真-4)、酷暑と戦いながらの造林作業は大変な苦労と周到な計画、多くの技術を伴うことは想像に難くない。特に長期滞在の各専門官のご努力に対しては頭の下がる思いであった。一方、植付け後2年ほどで数mにも成長したメルクシマツ(写真-5)やアカシアを見せただき、関係者のご苦労が着々と実りつつあることも痛感した。その後いつの間にか約6年の歳月が流れた現在、見事な造林地が各所に生育していることを想像し、遙かな南の国に思いを馳せるのである。

新刊紹介

◎熱帯生態と土壤物理学 (LAL, R.: Tropical Ecology and Physical Edaphology. John Wiley & Sons, 732 pp., 1987. 邦価約30,000円)

著者 R. LAL はナイジェリアのインバダグンにある国際熱帯農業研究所 (IITA) の土壤学者である。本書は(1)熱帯生態、(2)生態的要因と土壤の物理性、(3)土壤への人為の影響、(4)熱帯農業発展にむけて、の4章からなる。(1)の熱帯生態は一般的な生態の記述でなく、書名を反映して、土壤に影響を及ぼす気象条件に焦点がおかれている。(2)は植生と土壤、とくに、ミミズ、シロアリ、アリの熱帯土壤生成に及ぼす効果について、(3)では人為の影響、すなわち耕耘方法、栽培方法のちがいが土壤に及ぼす影響、そして(4)では熱帯農業での土壤保全、その技術についての展望が述べられている。紹介者が土壤動物に関心を持っているせいもあるが、熱帯での土壤生成にはたす土壤動物の影響・効果を多くの論文を参考にして述べ、その役割を評価していることは特筆されよう。(渡辺弘之)